

中観派の二諦説における「考察」(vicāra)

那須 真裕美

1 はじめに

二諦説とは、言語や思考を離れた究極的な真理である「勝義諦」(paramārthasatya)と、凡夫である我々が通常正しいと認識する「世俗諦」(saṃvṛtisatya)の二者から構成されるものである。

しかし、中期中観派以降の論師の想定する二諦説には、各々名称は異なるにせよ、ヨーガ行者(yogin)を「勝義へ志向させる諦」の役割を果たすものが共通して用いられる。これらの要素を、二諦説を形成する上で重要な働きをする「考察」(vicāra)という視点から検討すると、勝義へ志向させる諦および世俗諦に対する各論師の考え方に差異が見られることが明らかになる。これまでに、中観派の各論師の二諦説の中で機能する考察に主眼を置いたいくつかの二諦説研究がなされている⁽¹⁾が、本研究は中期から後期、すなわち「縦の時系列」を軸にして、とくに勝義へ志向させる諦と考察の関係の変化に着目して進めるものである。

学会発表時には、中期中観派としてバーヴィヴェーカ(Bhāviveka, ca.490–570)とチャンドラキールティ(Candrakīrti, ca.600–650)、後期中観派としてシャーンティデーヴァ(Śāntideva, 8cent)、ジュニャーナガルバ(Jñānagarbha, 8cent)、シャーンタラクシタ(Śāntarakṣita, ca.725–784)を概観するかたちで取り上げた。しかし、本稿では紙幅の関係上、中期中観派のバーヴィヴェーカとチャンドラキールティにより重点を置いて、検討を進めるものとする。

2 「勝義へ志向させる諦」と「考察」(vicāra)

中期中観派以降の論師たちは、勝義諦と世俗諦のみから構成される二諦説の中に、便宜的に勝義諦、あるいは世俗諦に基づいて設定された「(ヨーガ行者を)勝義へ志向させる諦」を説く。仮言的に設けられたそれらの諦は、勝義を得るために行う考察(vicāra)の対象として用いられる。

2.1 バーヴィヴェーカの協約的勝義諦

バーヴィヴェーカにとっての「勝義へ志向させる諦」とは、勝義諦に基づいて設定されたものであり、TJ ad MHK 3.26に見られる3種の勝義解釈のうち、Bahuvrīhi 解釈によって説明される「勝義に適合するもの」である。これを、PP 註釈者であるアヴァローキタヴラタ

は、言葉によって表現される勝義、すなわち「協約的勝義諦」(*sāṅketika-paramārthasatya, brdar brtags pa'i don dam pa'i bden pa) と名付けた。PPT 24.8 では、第一義的な勝義的勝義諦を知らしめるために比喩的に勝義と呼ぶものであると説かれ、その例として無分別智・不生等の教説・聞思修から生ずる智慧が挙げられている⁽²⁾。

この勝義諦が具体的に用いられる例は、彼が空性論証で用いることで知られる限定辞「勝義という観点から」(paramārthatas) にみられる。ツォンカパの『未了義了義善説心髄』には、TJ ad MHK 3.26 の文言を引いて、第二の勝義を説明する。

勝義は二種である。その内、第一のものは、努力なく働く出世間的な、無漏の、言葉を伴わないもの (nisprapañca) である。第二のものは、努力を伴って働く、福德と智慧の資糧に従う、清浄な世間智といわれる、言葉 (prapañca) を伴ったものである。ここで、それ (= 第二の勝義) を主張命題の限定辞として理解するので、過失はない

と [バーヴィヴェーカは TJ 3.26 で] お説きになっている。勝義を考察する道理智 (= 第二の勝義) も、それ (= 勝義) と認められるべきであって、聖者の後得の道理智のみではない。それであるから、中観派や余の人たちが有と無を考察するそのものは勝義という観点から無である、という意味は、そのものが勝義を考察する道理という点では無であって、それ (= 道理智) によって不成であるというのである⁽³⁾。

ここでは、第二の勝義が限定辞「勝義という観点から」のことであり、勝義を考察する道理智のことだと明確に説かれている。

2.2 チャンドラキールティの vyavahārasatya

バーヴィヴェーカと同じ中期中観派のチャンドラキールティの二諦説において、「勝義へ志向させる諦」として用いられたのは vyavahārasatya である。バーヴィヴェーカの協約的勝義諦が勝義諦に基づいて設定されたのに対して、チャンドラキールティの vyavahārasatya は世俗諦に属するものである。

二諦の区別を説く MABh ad MA 6.80 に、vyavahārasatya の性質に関する記述がある。

ここで、説示された言語慣用の諦 (vyavahārasatya) は方便所生である。…〈中略〉…言語慣用の諦のみに住して勝義が示され、[言語慣用の諦によって] 勝義の教説を理解することによって、そして勝義を証得する。以下のように [中] 論 [24.10] で [ナーガールジュナは]

言語慣用によらずに勝義は説示されない。勝義によらずに涅槃は証得されないとお説きになる。ここで、勝義の説示は方便所生であり、果であるものである。すなわち [説示された勝義諦 (= 言語慣用の諦) は] 方便所生であり、果であり、証得されるべきものであり、考察されるべきものである⁽⁴⁾。

チャンドラキールティの世俗 (saṃvṛti) の三要素として言説 (vyavahāra) が挙げられることから、考察されるべきものである vyavahārasatya は世俗諦と解される可能性もある。しかし、後述するようにチャンドラキールティの世俗諦は、考察の対象にはならないものである。このことから、vyavahārasatya は世俗諦の一種であり、考察の対象となるものと解する⁽⁵⁾。

2.3 後期中観派の「勝義へ志向させる諦」

「勝義へ志向させる諦」という観点から概観すれば、ジュニャーナガルバやシャーンタラクシタは、おおむねバーヴィヴェーカの方法論を継承したものだといえる。特に勝義諦説において類似点が指摘されるジュニャーナガルバは、勝義諦に「非顕現の勝義諦」⁽⁶⁾と「正理に従う諦」⁽⁷⁾を設定し、後者を「勝義へ志向させる諦」として用いた。

しかし、同じく勝義諦に基づいて「勝義へ志向させる諦」を設定するにも関わらず、バーヴィヴェーカと後期中観派のジュニャーナガルバやシャーンタラクシタたちの間には大きな差異が存在する。それは、後者が「勝義へ志向させる諦」を「考察すれば世俗に他ならないもの」と性格付けることに起因する。バーヴィヴェーカの著作には、このような記述は見られない。まず、ジュニャーナガルバの「正理に従う諦」とは、SDV の記述に従えば「三相を具えた証因に基づく知識」のことであり、第二の勝義である。

しかし、それ (= 正理に従う諦) も、考察すれば世俗に他ならない。何故ならば、
否定されるものが存在しないので、真実という観点からは明らかに否定は存在しない //SDK9cd//

即ち、否定されるものが存在しないならば、否定は起こらないからである。即ち、対象を有さない否定は理に適わないからである⁽⁸⁾。

論理や言葉と結びつく第二の勝義は、ヨーガ行者を勝義へ志向させるための考察の対象であるが、その考察の結果として真理性を否定され、世俗諦へと変換するものである。『菩提道次第論中篇』には、「正理に従う諦」自身が元来、勝義を得るための考察に耐えうるものではないと説かれている。

軌範師ジュニャーナガルバが、勝義として諦であるので勝義諦であると説いていることも、彼は道理知も勝義として説いているのであるので、それ (= 道理知) の側における、欺きなきこと (avisamvāda) を諦であるとお説きになられているのであって、[道理智である勝義諦が] 考察に耐える諦として成立したものと密意されているのではない⁽⁹⁾。

第二の勝義を考察の対象とし、考察によってその真実性を否定する方法は、続くシャーンタラクシタにも継承されている。シャーンタラクシタの第二の勝義は、不生等の教説に代表される「勝義に相應する諦」である。

不生等 [の教説] も実世俗に含まれるのに、
勝義に相應するから、これ (= 不生等の教説) は勝義である、といわれる。(しか

し) それ (=勝義諦) は、あらゆる言葉 (prapañca) の集まりを完全に離れたものである。 //MAK70//

勝義諦とは有と無、生と不生、空と不空等という、あらゆる言葉の網が断ち切られたものである。不生等 [の教説] がそこ (=勝義諦) への悟入に相應するから勝義諦である、ということは [バーヴィヴェーカによって] 比喩的に語られたことである。

真実の宮殿の頂に登ることは、実世俗 (tathyaśamvṛti) の階梯なしでは可能でない。先ず、世俗諦によって知識 (mati) を明らかにするべきである。そしてものの独自 [相] と一般相に対して納得すべきである //MHK3.12//⁽¹⁰⁾

以上のように、勝義諦に基づいて設定されたバーヴィヴェーカの協約的勝義諦、ジュニャーナガルバの正理に従う諦、シャーンタラクシタの勝義に相應する諦、そして世俗諦の一種として設定されたチャンドラキールティの vyavahārasatya、いずれの「勝義へ志向させる諦」もが考察に関係することを確認した。

さて、バーヴィヴェーカの協約的勝義諦が考察に関わることに疑いの余地はないが、両者を直接結びつける記述は、いずれも後代の手になるものであり、バーヴィヴェーカ自身の記述には見られない。これについて江島氏は、「考察 (vicāra) という用語は、彼が空思想論証の推論式に附する『勝義において』という限定の中に吸収してしまっていると見られる」との説⁽¹¹⁾を提示する。筆者もこの説を支持するが、バーヴィヴェーカが「協約的勝義諦を考察の対象とする」という記述を明らかに為さないのに対して、チャンドラキールティ以降が「勝義へ志向させる諦を考察の対象とする」と明言することに関しては再考の必要があると考ええる。

3 世俗諦と「考察」(vicāra)

「勝義へ志向させるための諦」が必ず考察と関係するのとは異なり、世俗諦が考察の対象となるか否かに関しては、各論師たちの間に相違が見られる。大別すると、ヨーガ行者が「世俗諦を考察の対象とする」か、「世俗諦を考察の対象としない」かのいずれかである。前者には中期中観派のバーヴィヴェーカ⁽¹²⁾、後者には中期中観派のチャンドラキールティ、後期中観派のジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタが分類される。

3.1 世俗諦を考察の対象とする

世俗諦を考察の対象とするバーヴィヴェーカは、正しい世俗諦、すなわち実世俗を考察の対象として用いることにより、勝義へ志向させる手段とする。

その (=真実の宮殿の) 頂に昇ることは、正しい世俗諦の階梯を七阿僧祇劫の間行くことなくして、波羅蜜と増上力と神通は完成しないので、直ちに [完成することは] 可能でない。…〈中略〉…一般的に認められたもの (prasiddha) を考察したのち、その後に諸法の独自 [相] と一般相の決定がなされるであろう。その故に、それ (=相の決定)

によって、無相なる勝義の後得の世間智の境である、正しい世俗の考察を「世俗智である」と説く⁽¹³⁾。

この TJ ad MHK 3.12-13 の記述に見るように、バーヴィヴェーカは世俗諦と「勝義へ志向させる諦」である協約的勝義諦を共に考察に関連させて、究極的な目的である勝義的勝義諦を得る手段とする。

3.2 世俗諦を考察の対象としない

バーヴィヴェーカの例に対して、先の vyavahārasatya の検討で触れたように、チャンドラキールティの想定する世俗諦は考察の対象となるものではない。世俗諦自身が考察を経ずに成立したものであると、PSP 7.14a には説かれている。

およそ本体として無自性である諸々のもの、それらは無自性なものであるのに、「これは真理である」と執着する愚者たちが、まさに考察することなく成立した (avicāraprasiddha) やり方 (= 世俗諦) によって言語慣用の道 (vyavahārapatha) に到るのである。それ故に、それら (= 世俗諦) に対して先述の考察に入ることは、我々にはない⁽¹⁴⁾。

そして ŚSV ad ŚSK 1 の記述によるならば、世俗諦の内容は考察する必要はなく、勝義的な考察を経ていないそれはヨーガ行者にとっては真実 (諦) ではないと規定される。

まず、それ (すなわち) 世俗 [諦] と述べられるもの、それ (= 世俗諦) は真実のものではない。何故ならば、世間の人々によって理解されるものであるからである。その対象を考察する必要はない。世間の言語慣用において諦であるもの (lokavyavahārasatya) として認められるものは、また聖者 (= ヨーガ行者) の世間世俗諦として認められる⁽¹⁵⁾

チャンドラキールティは、凡夫にとっての実世俗である「世俗諦」と「世俗諦ではないもの」(非世間世俗 alokaśaṃvṛtti) を設定すると同時に、ヨーガ行者にとっての「実世俗」と「世俗諦ではないもの」を設定する。そして、凡夫にとっての「世俗諦」はヨーガ行者にとっての「世俗諦ではないもの」に相当し、勝義的な考察の対象にならないそれを否定して、考察に値する vyavahārasatya を用いて勝義へ志向させるための考察を行うのである。

後期中観派のジュニャーナガルバとシャーンタラクシタも、チャンドラキールティ同様に実世俗である「世俗諦」と「誤った世俗」(邪世俗 *mithyāśaṃvṛti) を用いる。凡夫とヨーガ行者の二重構造は明らかに記述されていないが、ジュニャーナガルバは、凡夫にとっての世俗諦をヨーガ行者の行う考察の対象とはしない。

(世俗諦とは) 顕現するままのものを本性とするものなので、これ (= 世俗諦) に対して考察はなされない。もし (世俗諦に対して) 考察するならば、異なった意味に到るという過失に陥るだろう //SDK21ab//

我々 (= 中観派) は、これ (= 世俗諦) に対して考察しないが、[ある者が世俗諦に対し

て] 考察する場合には[我々はそれを] 否定する⁽¹⁶⁾。

ジュニャーナガルバに続くシャーンタラクシタも、世俗諦は考察の対象でないという考えを採用するが、同時に若干ジュニャーナガルバとは異なる点も見られる。シャーンタラクシタは、単に世俗諦を考察の対象ではないと切り捨てるのではなく、MAV ad MAK 64,65 周辺の記述に見られるように、「考察されない限り好ましいもの」と規定する。

本性として世俗的なもの(=世俗諦)は、考察されない限り好ましいものであり、生と滅という属性を持つものであり、効果的作用(arthakriyā)を持つものであると知られるべきである。 //MAK64//

この世俗とは、語である言語慣用(vyavahāra)のみを本体とするもの(=邪世俗)ではなく、経験され認められているものであり、縁によって生ずるもの等であり、考察には耐え得らないものである(=世俗諦) 実世俗である⁽¹⁷⁾。

シャーンタラクシタは、勝義的な考察を行わない限りは世俗諦を実世俗としてその真実性を認めるが、バーヴィヴェーカのように「勝義へ志向させる諦」とあわせて考察の対象とすることはない。続く MAK 65 に見るように、勝義的な考察には耐え得らないものと説く。

考察されない限り好ましいもの(=世俗諦)は、前の自らの原因によって、後に同じような(世俗的な)結果が生ずることである //MAK65//

それ(=世俗諦)については既に述べた。(世俗諦は)考察に耐えることができないものであり、効果的作用を持ち、実世俗といわれ、ブドガラ等のように言葉だけのもの(=邪世俗)ではないと[既に述べた]⁽¹⁸⁾。

以上、チャンドラキールティ、ジュニャーナガルバ、シャーンタラクシタが一貫して「世俗諦は考察の対象ではない」という姿勢をとったことを確認した。バーヴィヴェーカの「世俗諦を考察の対象とする」という立場とは真っ向から対立するこの考えは、何に起因するのか。筆者は現時点で、バーヴィヴェーカの世俗諦はヨーガ行者の智慧に関わるが、チャンドラキールティたちの世俗諦はそれに関係しないという点に基づくと考えている。しかしこの点に関しては紙幅の関係もあり、更に検討を行った上で、別稿にて改めて論じたい。

4 中期中観派と後期中観派の二諦説に見る「考察」

ここまで「考察の対象であるか否か」という観点から二諦を検討してきたが、では、考察者であるヨーガ行者を勝義へ志向させるための考察とは、いかなるものであるのか。世俗諦と考察との関係と同様に、考察の内容に関してもバーヴィヴェーカとチャンドラキールティ以降の論師とでは、意図する旨が異なると考えられる。

まず、バーヴィヴェーカが想定した考察の内容は、検討の対象が「勝義という観点から判断して妥当か否か」である。

——中観派の二諦説における「考察」(vicāra)——

知識 (mati) を統一した後に、智慧によって以下のように観察すべきである。
世俗という観点から、これら諸々のものの本性であるものを把握すべきである

//MHK21//

とは、「彼 (= ヨーガ行者) の心に統一された知識、(すなわち) 三昧が生じた後、世俗 (vyavahāra) という観点から (諸々の本性を) 把握すべき」とは、世俗諦というやり方によって確立された諸々のもの、…〈中略〉… これらを智慧によってそのように観察すべきである。

知識によって考察 (vicāra) する場合、これら (= 諸々のものの本性) は勝義という観点から、どのように存在するのか //MHK22ab//

とは、彼 (= ヨーガ行者) が知識によって考察する (parikalpa) 場合、これら本性は勝義という観点からも妥当であるのか、それともどのようにして考えられるのか、と⁽¹⁹⁾。

「ものの本性が存在する」と考えるのは世俗諦としては妥当であるが、勝義という観点からは相応しくない。「勝義としてはものの本性は存在しない」と考えるのは勝義諦として妥当であるが、言語や思考を離れた究極的な勝義的勝義諦としては妥当ではない。

対するチャンドラキールティにとって、ヨーガ行者が行うのは「自から生じるか他から生じるか等の考察」である⁽²⁰⁾。この考察内容によって世俗諦と vyavahārasatya を区別する重要なものでもある。

[世俗諦は] 自と他からの生起が考察されない場合、世間的な知識 (lokikamati) と認められる。何となれば、

それらのもの (= 五蘊) を考察するならば、真実を本性とするものであるのであって、自らの側において [生等のものとして] あるとは理解されない。それ故に、世間の人々の言語慣用の諦 (lokavyavahārasatya) (= 世俗諦) に対して考察すべきではない。 //MA6.35//

何となれば、色と受等であるそれら (= 五蘊) は、自から生ずるか他から生ずるかという、以上のこと等を考察する場合、勝義として不生不滅であることを本性とするものとしてあるので、生等のものとしてあるのではない。それ故に、自と他から [生ずる] という以上のこと等を考察せず、世間極成である「これがある場合にそれが生ずる」というそのみが、他によって働くという観点から認められるべきである⁽²¹⁾。

この記述から、世俗諦とは自と他からの生起に関して考察がなされていない場合にのみ成立するものであり、すなわち勝義へ志向するために行われる考察とは、「自と他からの生起」に対するものである。またシャーントラクシタは、SDP ad SDK 21 において「聞思修によって生じた智慧」を挙げる。

「特徴を把握すること」(nimittagrāha) に、無始爾来入っている顛倒した習気 (vāsanā) から生じたものに執着しているので、ものの真実を考察 (parīkṣā) することを忘れてるので、無知な者は凡夫である。聞思修の次第によって知識 (buddhi) を起こしていな

い人々に対して、そのように示される。…〈中略〉…「顕現するまゝを本性とするので」とは、(世俗諦は)考察(vicāra)しなければ好ましいものであるからである。これ(即ち)世俗諦を考察して、すなわち考察することはない⁽²²⁾。

聞思修によって生じた智慧を持たない凡夫は、考察を行わないので「考察されない限り好ましいもの」である世俗諦を真実と誤解する。換言すれば、世俗諦の真実性を否定する考察は、聞思修によって生じた智慧に裏づけられるものだと言える。

5 結語

以上、検討した各論師は各々「勝義へ志向させる諦」を考察の対象としたが、世俗諦をも考察の対象とするか否かという点では、異なった考えが見られた。「勝義へ志向させる諦」と世俗諦の両方を考察の対象としたのは、バーヴィヴェーカのみである。チャンドラキールティ以降は、世俗諦を考察の対象から除外し、「勝義へ志向させる諦」のみを考察の対象として、ヨーガ行者が勝義を得るための手段とするように変化した。

本研究は、「縦の時系列」から二諦と考察の関連の変化を確認しようとすることを目的としたものであったが、バーヴィヴェーカとチャンドラキールティ以降で異なりを見せる考察の内容や、バーヴィヴェーカとチャンドラキールティの世俗諦に関する解釈の違いなど、一列に並べて比較するにはいくつかの問題点があることができた。特に各論師の解釈に特徴のある世俗諦と考察の関係については、改めて今後研究を進める所存である。

略号及び使用テキスト

PP	<i>Prajñāpradīpa-mūlamadhyamakavṛtti</i> . P.No.5253, D.No.3853
PPT	<i>Prajñāpradīpa-ṭīkā</i> . P.No.5259, D.No.3859
PSP	<i>Prasannapadā</i> . Poussin ed. <i>Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti</i> , 1970.
MABh	<i>Madhyamakāvatāra-bhāṣya</i> . Poussin ed. <i>Madhyamakāvatāra par Candrakīrti</i> , 1970.
MAK & MAV	<i>Madhyamakālamkāra-kārikā & -vṛtti</i> . Ichigo ed. <i>Madhyamakālamkāra</i> , BUNEIDO, 1985.
MHK	<i>Madhyamaka-hṛdaya-kārikā</i> . Ejima ed. 『中観思想の研究』, 春秋社, 1980.
SDK & SDV	<i>Satyadvayavibhaṅga-kārikā & vṛtti</i> . Eckel, M.D. ed. <i>Jñānagarbha's commentary on the distinction between the two truths</i> , SUNY, 1987.
SDP	<i>Satyadvayavibhaṅga-panjikā</i> . P.No.5283 D.No.3883
TJ	<i>Madhyamaka-hṛdaya-vṛtti-tarkajvālā</i> . S.Iida ed. <i>Reason and Emptiness</i> , Hokuseido, 1980.
SSK & SSV	<i>Śūnyatāspatati-kārikā & vṛtti</i> . Erb ed. <i>Śūnyatāspatativṛtti</i> , Tibetan and Indo-Tibetan studies 6, 1997.

註

- (1) 考察 (vicāra) に主眼をおいて二諦の検討を行った従来の研究として、以下の研究論文を挙げることができる。
 江島恵教「中観派における対論の意義」(1980)
 小川一乗「実世俗 (tathya-saṃvṛti) の教証について」(1987)
 加藤均「vicāra と saṃvṛtimatra の関連性について」(1989)
 「中観派に於ける vicāra の実践的意味」(1990)
 岸根敏幸「チャンドラキールティの二真理説」(2001)
 森山清徹「後期中観派の唯心説と二諦説」(1991)
- (2) PPT 24.8 (P.282b ll.2-3, 6-8, D.236b ll.2-3, 5-8)
- (3) Legs bshed snying po (Katano ed. p.68 ll.4-9)
- (4) Poussin p.178 ll.8-15
- (5) この点に関しては、拙稿「チャンドラキールティの vyavahāra」『印仏研』48-2 (2000)、および「中観派における vyavahārasatya の解釈」『仏教学研究』57 (2000 予定) で論述した。
- (6) SDV 5 (Eckel ed. p.157 ll.10-17) 勝義は「顕現するままのもの」として確立するものではない。何故ならば、勝義は一切智者の智慧にすら決して顕現しないものである。
- (7) SDV 4ab (ibid. p.156 ll.11-24) 「正理 (nyāya) に従うもの (=知識)」こそが、勝義としての諦である。
- (8) SDK ad SDV 4ab (Eckel ed. p.156 ll.11-24)
- (9) Lam rim chen mo (Tsul trim ed. p.104 ll.4-6)
- (10) MAV ad MAK 70 (Ichigo ed. p.230 l.1-p.232 l.7)
- (11) 江島 [1980] p.172
- (12) シャーンティデーヴァが考察 (vicāra) という語を用いる例を見ると、その対象は「有我」「有因」「有自性」などの一般的に認められた事柄、すなわち世俗諦であることが推測される。
- (13) TJ ad MHK 3.12-13 (Op. cit. ed. p.67 l.30-p.68 l.5, p.68 ll.21-32)
- (14) PSP 7.14a (ibid. p.172 ll.12-14)
- (15) ŚSK ad ŚSV 1 (Erb ed. p.212 ll.30-33)
- (16) SDK ad SDV 21 (Eckel ed. p.175 ll.7-12)
- (17) MAV ad MAK 64 (Ichigo ed. pp.202-204)
- (18) MAV ad MAK 65 (ibid. p.210 ll.8-19)
- (19) TJ ad MHK 3.21-22ab (Iida ed. pp.76-77)
- (20) この考察の内容はチャンドラキールティに限らず、後期中観派のカマラシーラも、三慧のうちの思 (cintā) の考察内容として用いている。森山清徹「Kamaraśīla の唯識思想と修道論」参照。
- (21) MABh 6.35 (Poussin ed. p.120 ll.1-4)
- (22) SDP ad SDK 21 (D38b4-39a1)